

# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

集落みんなで守る『みかんの里』～子供の声がこだまする郷づくり～

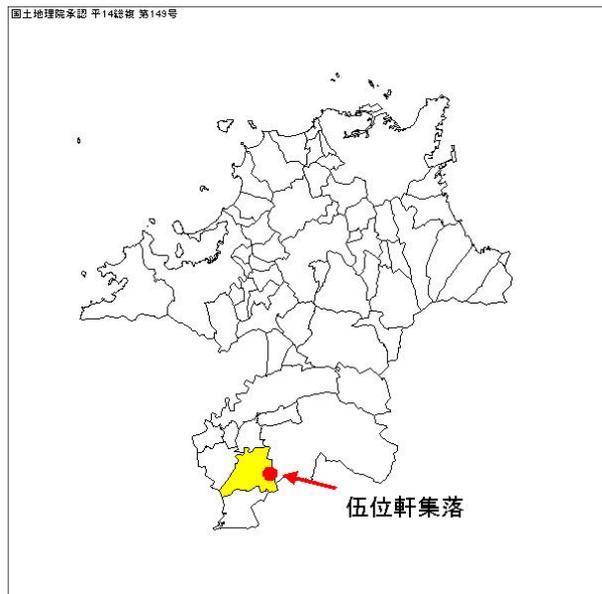
ごいのき  
受賞者 伍位軒集落  
ふくおかけん  
(福岡県みやま市)

## ■ 地域の沿革と概要

みやま市は、平成19年に山門郡<sup>やまとぐん</sup>瀬高町<sup>せたかまち</sup>及び山川町<sup>やまかわまち</sup>並びに三池郡高田町<sup>みいけぐん たかたまち</sup>の3町が合併して誕生した。福岡県南部に位置し、有明海沿岸の平坦地域から筑肥山地の山麓地帯にまたがっている。

市の西部は有明海の干拓によって開かれた穀倉地帯で、東部は丘陵や山が連なって農業が盛んな地域である。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

伍位軒集落のある山間地は、地質の多くが砂壤土又は壤土であり、耕土が浅く排水性が良いことから、ミカン栽培に適している。本地区におけるミカン栽培は、「福岡県果樹発達史」によると、1830年～1840年代から始まったとされている。

本集落は、国道443号線から御牧山<sup>おまきやま</sup>に向かって3kmほど入った標高180mの山間部にある。集落は周囲を傾斜の厳しい山林に囲まれ、主にミカン、タケノコが栽培されており、29世帯のうち27世帯が農家でその全てが専業農家である。

第1表 地区の概要

地区の規模	集落の集合体
地区の性格	地縁的な集団等
農家率 (内訳)	93.1% 総世帯数 29戸 総農家数 27戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 27戸 1種兼業農家 0戸 2種兼業農家 0戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 165ha 耕地面積 86ha 田 4ha 畑 25ha 樹園地 57ha 耕地率 52.1% 農家一戸当たり耕地面積 3.2ha

### 2. むらづくりの基本的特徴

#### (1) むらづくりの動機、背景

旧山川町のミカン栽培は、昭和40年代前半までは順調に生産を伸ばしてきたが、昭和48年のオイルショックを境に価格が暴落し、ミカン農家の経営は悪化の一途をたどった。

しかし、伍位軒地区は、新品種の高品質ミカン「山川早生」や「原口早生」の導入により経営安定を図り、厳しい時期を乗り越えた。他産地ではミカンの園地転換による伐採が進む中、伍位軒集落では市場動向を把握し、品種更新にいち早く取り組み、園地伐採を行わなかった。

また、昭和61年のガットウルグアイ・ラウンド交渉開始により、平成3年にオレンジが輸入自由化され、再びミカンの価格が低迷した。伍位軒集落の農家は、将来のミカン経営に大きな不安を抱き、産地生き残りのために、省力化と高品質ミカンの生産が可能な園地整備の必要性を強く感じていたことから、開墾の方法を山なりから等高線に転換し、作業の省力化を行った。

さらに、平成4年頃から乗用の防除機であるスピードスプレーヤー（以下「SS」という。）を導入し、平成6年には重機の園内搬入等のための道路拡幅工事を農家による自主施工で行った。その後、高品質ミカンの生産のために不可欠なシートマルチ栽培を導入するため、園内からの流出水による土砂災害を防止するための流末排水対策を山川町に要望した。

一方、「行政任せではなく、自分たちでやれることは自分たちでやろう！」とのスローガンの下、「行政区で取り組むこと」と「集落協定で取り組むこと」について集落で話し合い、中山間地域等直接支払制度を活用して収益性の高い園地の条件整備や生活環境の改善に取り組むこととなった。

## （2）むらづくりの推進体制

国の中山間地域直接支払制度の創設を契機に、それまで地域内の話合いが必ずしもうまくできていなかった上伍位軒集落と下伍位軒集落が一体となり、「伍位軒協定集落」として活動を開始している。

会合は朝一番に行うことが恒例となっており、「できる改善は即実行」をモットーに合意を得たらすぐに改善が行われている。

### ア 役員会

役員会は、三役（代表者、書記、会計）と連絡員（上伍位軒5名、下伍位軒2名）の10名で構成。

この役員会には、行政区内への周知と行政との連絡役として必ず伍位軒行政区長が参画している。

集落協定に基づき、役員会において企画立案を行い、地区全員で以下の活動を行っている。

#### ① 作業効率化を目指した園地造成と園内道路整備

機械作業効率を向上させるため、SSでの作業に対応した園地の造成や園内道路の整備を行うとともに、集落内の生活道路の道路拡幅工事に取り組んでいる。

#### ② 園地崩壊や土砂災害

園地造成により地形変化の影響などで雨水の流れが変化することから、土砂災害の未然防止を目的に、必要な資材については市から提供

を受けて、流末排水対策を取り組んだ。

### ③ 鳥獣害防止を目的とした荒廃農地の管理

荒廃農地がイノシシ等のすみかとなり、ミカンへの被害が増加したことや地元住民への危害が心配されたことから、荒廃農地において、雑草の除去、雑木等の伐採、電気柵の設置等を行っている。

### ④ 農山村景観の向上を目的とした景観作物作付け

農山村景観の向上のため、道路沿いの畑や沿道にレンゲや彼岸花の作付けを行っている。

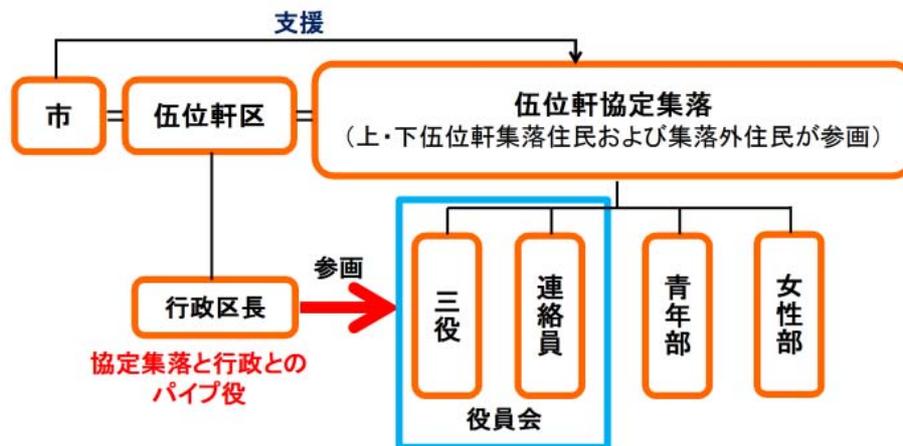
## イ 青年部

高所作業車運転資格を取得するとともに、高品質ミカンの生産に向けた土づくりや肥培管理、ミカンの生理・生態等の研修会に積極的に参加している。

## ウ 女性部

「女性が経営に参画し、経営改善に関わらなければ、農業・農村は発展しない」との女性リーダーの発案で、パソコン簿記記帳による経営管理や栽培技術、マーケティング等の研修会に積極的に参加している。

第2図 むらづくり推進体制図



## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

ミカン栽培に適していた伍位軒集落においても、ミカン栽培を継続するには、ミカンの価格低下や消費減退に対応していく必要があった。

そこで伍位軒集落では、「行政に任せるのではなく、自分たちでできることは自分たちでやろう!」、「できる改善は即実行」をモットーに、園地整備や機械導入による省力化、優良品種の導入やシートマルチ栽培の拡大など高品質ミカンの生産に積極的に取り組んできた。

その結果、ミカン経営が安定して地域外に出ていた若者がUターン就農したことにより、集落に子供が増え、集落全体に活気をもたらしている。

## 2. 農業生産面における特徴

### (1) 自主施工による園地整備

地元住民は、土木工事の知識や技術がなかったため、園地造成や土木機械に詳しい人から実地で技術を習得し、重機の園内搬入のための道路整備や流末排水対策のためのコルゲート管埋設を行った。

これにより、新たな園地整備が可能となり、現在もミカンの木の改植と併せて年間4～5haの園地整備を行い、地区内の樹園地の8割強で整備が完了した。

また、自主施工による園地整備に取り組んだことで、業者委託と比較して整備費用を3分の1程度に低減できた。



写真1 コルゲート管の埋設

### (2) ミカン栽培の省力化

自主施工による園内道整備とSS等の導入を他地域より早くから取り組んだ結果、SS利用率は100%で、軽トラックによる園内への乗り入れも可能となり、防除作業をはじめとして施肥や収穫などが省力化されている。伍位軒集落においては、1戸当たりの経営面積が平成12年の1.6haから平成26年の2.1haに増加するなど、経営規模の拡大につながった。特にSS利用率の向上は、防除時間の大幅な短縮と薬剤散布量の低減につながるほか、肥料の葉面散布を数多く実施することが可能となり、品質の向上と隔年結果の防止に役立っている。

### (3) 優良品種「北原早生」の導入

「北原早生」は、平成13年に伍位軒集落の北原夫妻が「原口早生」の枝変わりとして発見した早生ミカンである。その特徴は、果皮の朱色が濃く、従来品種より糖度が2度以上高いというものであり、10月に成熟する他の品種と比べて極めて優秀な特性を持っている。

北原夫妻が「地域のミカン農家の所得向上と産地活性化のために北原早生を活用してほしい」という思いを持っていたため、JAみなみ筑後が「北原早生」の品種登録の出願を行い、平成21年4月に登録された。

伍位軒集落の農家は、この「北原早生」の生産拡大を最重点に取り組み、「北原早生」の誕生から5年で導入面積は11haまで増加し、集落全体の20%を占めるようになった。

また、高品質ミカンの生産に向けてミカンの着色や糖度を高めるため、土壌水分を制御する栽培法である「シートマルチ栽培」についても積極的に取り組み、現在では園地整備が終了した果樹園全てでこの栽培方法を実施している。その結果、糖度11.5度以上のブランド商品率は



写真2 シートマルチ栽培

平成26年には伍位軒集落平均で43%となり、JAみなみ筑後柑橘部会平均の25%と比較して群を抜く成績を残している。

「北原早生」のトップブランド「黒箱」（糖度12度以上、酸度1%以下）は、全国で同時期に出荷される温州ミカンの約2倍の価格（355円/kg（平成22～26年平均））で取引され、生産者意欲の向上につながっている。

#### （４）ミカン経営安定による後継者の確保

園地の整備、「北原早生」の導入等による高品質ミカンの生産により、ミカン農家の経営基盤が強化されて収益性が格段に向上し、集落の平均農業所得が660万円（推定値）と安定した農業所得を得ることができるようになった。このことでミカン経営に対する意欲が急速に高まり、地域外に転出していた若者たちは就農について具体的に考えるようになった。



写真3 若い後継者が増加

伍位軒集落では、平成22年から平成26年までの4年間でおおむね40歳以下の若者4名がUターンにより就農するなど、後継者が着実に確保されている。

#### （５）女性活動の活発化

「今後の農業は経営管理が重要である」との思いから、女性農業者が平成12年からパソコン簿記講座を受講するなど、農業経営に意欲的に取り組む女性農業者が増えてきている。

平成23年度には初めて、伍位軒集落から福岡県女性農村アドバイザーが認定され、農業・農村の活性化に重要な役割を果たしている。



写真4 パソコン簿記に取り組む

また、昭和30年頃から始まった月1回の農休日の取組は、現在は月2回となり、旧山川町内では伍位軒集落のみで続いている。

### 3. 生活・環境整備面における特徴

#### （１）生活環境整備の取組

生活道路沿いに生えている雑高木の枝や幹が大型機械や車に接触して危険だったため、以前は集落全員で梯子はしこを使って枝打ち等を行っていた。しかし、平成25年に青年部が高所作業車運転資格を取得したことにより、現在は高所作業車をリースして、2人1組で安全かつ効率的に枝打ち作業を行い、安心して道路を通行できるようになっている。

また、集落の景観を良くするため、休耕水田へのレンゲ作付けや沿道への彼岸花植え付けを行っているほか、イノシシのすみかとなる荒廃農地の草刈り等に取り組んだところ、イノシシ被害が減少しており、山道を歩いて通学する子供たちをはじめ、地元住民が安心して暮らせるようになっている。

## (2) コミュニティ活動の強化や都市住民等との交流

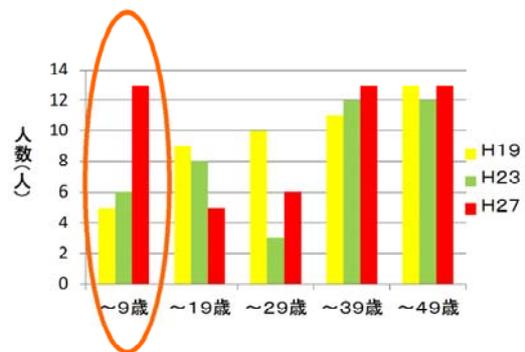
「山川町はみかんの産地」ということを広く知ってもらうため、地元の山川南部小学校の児童を招き、ミカンの収穫体験を行っている。収穫体験に当たっては、作業の前に「山川みかん」の歴史やミカン栽培の収穫方法に関する説明、ミカン栽培の苦労話などをしており、地元小学生の食育に貢献している。

また、近年のUターン者の増加で子供が増えたことによって、子供たちの健康と集落の発展を祈念する行事で、長年行われていなかった「ほうけんぎょう（どんど焼き）」が復活するなど、活気が戻っている。

## (3) 地域への定住促進がもたらす波及効果

子供が増加したことで、山あいの子供たちの明るい声がこだまするようになり、地元の人々からは子供たちから元気をもたらしているとの声が聞かれるようになった。

伍位軒集落は、中山間地域であるが、これまでにミカンの生産改善をはじめとして生活環境基盤づくりを集落住民が一体となって進めてきた地域であるため、今後とも若者のUターンが期待できる。



第3図 小学生以下の子供が増加